



**Data**

監督・脚本: 鄭有傑

出演: 莫子儀 / 陳淑芳 / 白潤音 / 姚淳耀 / 是元介 / 謝瓊煖 / 吳朋奉 / 沈威年 / 王可元 / 陳雪甄 / 胡廣雯 / 朱宥丞

## 👁️👁️ みどころ

第57回金馬獎で3部門を受賞した本作は、今流行(?)の“同性パートナー”を巡る人間ドラマ。冒頭は殺人と薬物所持を巡る法廷シーンから始まるが、ヒッチコック風のミステリー犯罪ドラマではなく、一つ一つ先行して提示される事実は一つ一つ丁寧に説明されていくので、それに注目!

もっとも、最後まで分からないのは同性パートナーの死亡。すべての物語はそこから始まったわけだが、最後にはそれに納得!なるほど、なるほど……。

———— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ——— \* ———

### ■□■第57回金馬獎3部門受賞作のテーマは?■□■

“台湾のアカデミー賞”と呼ばれる第57回金馬獎で、最優秀主演男優賞、最優秀助演女優賞、最優秀オリジナル音楽賞の3部門を受賞した本作は、法廷シーンから始まる。手錠を掛けられて法廷に連れて行かれた林健一(ジェンイー)(莫子儀(モー・ズイー))の容疑は殺人と薬物所持だ。ジェンイーには黙秘する権利と弁護士を付ける権利があることが告げられたが、さて、ジェンイーの対応は?

私はその後の法廷シーンの展開を期待したが、それは全くなく、スクリーンはすぐ別のシーンに転換する。それは、亡くなった王立維(リーウェイ)(姚淳耀(ヤオ・チュエンヤオ))の弟で、リーウェイの一人息子である王悠宇(ヨウユー)(白潤音(バイ・ルンイン))の叔父さんに当たる王立綱(リーガン)(是元介(ジェイ・ミー))が祖母の周秀玉(シウユー)(陳淑芳(チェン・シューファン))が暮らすマンションを訪れているシークエンスだ。その屋上のペントハウスの間借り人になっているジェンイーもその席で一緒に正月を祝っていたが、祖母と一緒に暮らしているヨウユーはどことなく不機嫌そうだ。また、彼らの全体の雰囲気は、どことなくぎこちない。ヨウユーはお年玉をもらって少しご満悦になった(?)が、ヨウユーの父親は何故そこにいないの?また、ヨウユーの母親は?

他方、ジェンイーはシウユーやヨウユーと一緒に食卓を囲むことなく、間借りしている

ペントハウスで1人食事をしながら、糖尿病のため壊死してしまった右足の痛みで苦しんでいるシウユーの介護をしていたが、それは一体何のため？また、この導入部のシークエンスの中で、ヨウユーはジェンイーの養子だと言っていたが、なぜジェンイーはそんなことをしたの？何より疑問なのは、そんな生活が続いているのなら、シウユーは当然ジェンイーに感謝しているはずだが、シウユーはある時、ジェンイーに対して、「私に尽くしたら息子が生き返るとでも思っているの？」ときつい言葉を発していたから、アレレ。

このように、本作導入部は、これらの登場人物を巡るさまざまな問題点を提示してくれるが、本作のテーマは一体何？

## ■□■なぜジェンイーに殺人と薬物所持の容疑が？■□■

「法廷モノ」には、検事、弁護士、裁判官という“法曹三者”が登場するはずだが、なぜか本作には、女性検事の張麗萍（チャン）（謝瓊煖）しか登場しない。そして、前記2つの導入部が終わった後の本作は、なぜジェンイーが殺人と薬物所持の容疑で法廷に立っているのかを少しずつ見せていく。

その第1弾はチャン検察官によるジェンイーの取り調べだ。そこでは、シウユーが不動産を孫のヨウユーに譲った時に、ジェンイーはヨウユーを養子にしていたのか？と質問されたが、ジェンイーは不動産の名義変更など全く知らなかったらしい。さらに、チャン検察官は「あなたと亡くなったリーウェイとの関係は？」と聞かれると、ジェンイーは、「・・・？」。やっと答えた「屋上のペントハウスの間借り人だ」との答えは正しいが、もちろん質問の趣旨はそんなことを聞くためのものではない。言葉に詰まりながら、結局ジェンイーは「リーウェイと付き合っていた。リーウェイと僕は同性パートナーだ」と答えたが、その意味は？また、「ヨウユーの母親はリーウェイの元妻だ」と答えたが、リーウェイは、なぜ元妻と離婚したの？さらに、「ジェンイーとリーウェイとの同性パートナーの関係については、シウユーから子供のヨウユーには言わないようにと口止めされていた」と答えたから、これにてすべては解明され、全てすっきり！

いやいや、コトは全く正反対だ。思わぬ事態の前に、ジェンイーは「もし僕が女でリーウェイの死亡後、シウユーの世話をしていたなら、同じ質問をするの？」と反論したが、それを聞くと、さらになんとなくモヤモヤ……。シウユーが糖尿病による右足の壊死で苦しんでいることは間違いないが、いつどんな状況下でシウユーは亡くなったの？また、薬物所持の容疑とは？

## ■□■事実の提示を先に！説明は後で！そんな手法で次々と！■□■

私は台湾の鄭有傑（チェン・ヨウジエ）監督作品を本作ではじめて観たが、本作は先に事実を提示して、観客に「それはなぜ？」と疑問を持たせた後に、少しずつスクリーン上でその説明をしていくという手法がとられている。それは映画演出でよく取られる手法だが、本作はそれがトコトン徹底されているので、それに注目！

本作導入部では、ジェンイーに殺人と薬物所持の容疑で裁判にされていることが明示さ

れるが、それに続いて明示されるのはシウユーの死亡。足の痛みで苦しんでいたものの、すぐに死亡するとは考えられないはずなのに、なぜ彼女は死んでしまったの？今日、警官の郭小隊長（吳朋奉）と小蔡（沈威年）がジェンイーのペントハウスを捜索令状を持って捜索したのは、シウユーの死亡に薬物が絡んでいたためだ。もし、ジェンイーのペントハウス内から同じ薬物が発見できれば、不動産取得目的のためにジェンイーがシウユーを殺害したことになるし、ヨウユーを養子にしたのもそのためということになる。そう考えれば、すべて合理的に説明できそうだ。郭小隊長と小蔡はそう考えたが、さて捜索の結果は？

### ■□■薬物の入手先は？売人との関係は？■□■

“紀州のドン・ファン”こと野崎幸助氏の殺人容疑で、元妻の須藤早貴が逮捕。2021年5月の日本列島はこのニュースで盛り上がったが、その決め手になったのは、須藤がネットで覚せい剤を入手していたことが判明したためだ。しかも、須藤はその証拠を隠滅するため、スマホの情報を抹消していたから、それは須藤に不利。本作中盤は、それと同じように、ジェンイーがネット上で、エリック（尤士軒）（王可元）からある種の薬物を入手していた事実や、ジェンイーがスマホ上のその情報を抹消していた事実が判明したから、ヤバイ。

警察の捜査網にかかったエリックを逮捕したことによって、エリックがジェンイーにある種の薬物を売っていたことが判明したが、それはシウユーが死亡する前日だったから、さらにヤバイ。ジェンイーがその日にエリックに連絡を取り、薬物を購入したのは一体何のため？そもそも、それまで何の縁もゆかりもなかったジェンイーとエリックが知り合ったのは何のため？それを巡って、スクリーン上には私はあまり見たくないシークエンスが登場してくる。去る6月17日に観た『戦場のメリークリスマス 4K修復版』では、デヴィッド・ボウイと坂本龍一とのキスシーンが今なお名シーンとして語り継がれているが、さて本作に見るジェンイーとエリックとの“絡みシーン”は？

### ■□■“パパ2号”誕生秘話は？回想シーンに見る秘話は？■□■

日本では養子縁組は戸籍上の届け出だけでオーケーだ。しかし、本作を観れば、台湾でのそれは、法廷に出廷して裁判官の前でそれを確認する必要があることがわかる。その手続きのポイントは、9歳のヨウユーがジェンイーの養子になることを理解し、承諾しているか否かだが、それをどうやって確認するの？裁判官から「養子の意味は分かる？」と聞かれたヨウユーは、「分かる」と答えたが、「ジェンイーをパパと呼びたいか？」と聞かれると、「呼びたくない」と答えたからアレレ。これでは養子縁組は無理。一瞬そう思ったが、ヨウユーは続いて「“パパ2号”と呼ぶ」と答えたから、裁判官の判断は？

他方、そんなシークエンスの中で回想シーンとして登場するのが、ジェンイーとリーウェイが仲良く共同生活を営んでいるシークエンスだ。今やLGBT（レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、両性愛（Bisexual）、トランスジェンダー（Transgender））は完全な市民権を得ている上、映画界ではそれが大人気のテーマになっている。そのため、「同性パートナー」と言う言葉も今や何の抵抗もなく受け入れられているから、本作でもこの回想シーン

に違和感はないようだ。しかし、ジェンイーは独身男性だから誰と付き合っても、誰と同性パートナーになってもオーケーだが、リーウェイはヨウユーの父親だし、ヨウユーには母親、つまり、リーウェイの妻がいるはずでは？すると、養子縁組をするについて、その処理は？

## ■□■シウユー死亡の真相は？その全貌は？■□■

本作では、シウユーが死亡したことは明示されるが、その死亡原因の説明はない。そして、そこにジェンイーの殺人容疑がかけられるところがストーリーのミソになる。アルフレッド・ヒッチコック監督なら、それだけをテーマにしたスリリングな犯罪映画を作るところだが、本作では、なぜジェンイーに殺人容疑がかけられているのかだけがわかればそれで十分だ。その原因が薬物であることが既に明示されるとともに、その提供者がエリックであることも明示されると、シウユー死亡の真相やその全貌が少しずつ見えてくる。

そして、本作中盤ではジェンイーがシウユーの痛み止めのためにエリックから購入し、台所にしまっておいた薬物を、ヨウユーがシウユーに求められるがままに提供し、シウユーが1粒ずつそれを飲んでいくシークエンスが描かれるから、それに注目！これが真相であり、全貌であることがわかれば、ジェンイーが殺人犯ではないことが明白だし、9歳のヨウユーに殺人の意思がないことも明白だ。ジェンイーが有能な弁護士に依頼してそのことをしっかり主張すれば、薬物所持の罪は認めなければならないものの、殺人容疑は無罪になること明らかだ。しかし、スクリーン上では・・・。

## ■□■同性パートナーとしての幸せな日々は？その崩壊は？■□■

本作では、冒頭からジェンイーがヨウユーの“パパ2号”になっていることが明示されるが、なぜヨウユーの父親であるリーウェイがいないのかさっぱりわからない。その上、本作中盤では、警察の捜査が迫る中、ヨウユーと2人でリュックとテントをもって山中に逃げ込んだジェンイーが、回想シーンの中で、リーウェイと同性パートナーになっていく物語が描かれる。リーウェイは、山登りの仲間だったジェンイーと一緒に登った山のテントの中で、妻と離婚すること、弟のリーガンの借金のために仕事を掛け持ちして働いているのにリーガンが中国本土に逃げってしまったことを打ち明けたが、そこでのジェンイーの回答は「俺が君が探している同居人になる。そして俺が君を養う」というもの。なるほど、そんな経緯によってジェンイーがペントハウスに住む（実は同性パートナーとして同居する）ことになったわけだ。

しかし、そのことを9歳のヨウユーにどう説明し、どう納得させるかは確かに難しいはず。しかも、そんなことが妻にバレたら、それが格好の離婚原因になってしまう上、リーウェイが妻に支払う慰謝料額も格段にアップしてしまうはずだ。今、ジェンイーを逮捕するためにテントまで追いかけてきた郭小隊長と小蔡を前に、身柄の拘束を覚悟したジェンイーは、ヨウユーに「これからはもう側にいられない。お前は何も悪くない」と語ったが・・・。ジェンイーとリーウェイがヨウユーを育てながら同性パートナーとして過ごした幸せな

日々は、シウユーの死亡に続く、こんな形でのジェンイーの逮捕によってあっけなく終わってしまったわけだ。しかし、シウユーの死亡に続いて、ジェンイーが死刑になってしまったら、ヨウユーはどうやって生きていけばいいの？

## ■□■逃亡した合歛山の標高は？高山病の心配は？■□■

私は台湾旅行に3回行ったことがあるが、ジェンイーが間借りしているpentハウスのあるマンションは、基隆の町にあるらしい。私も一度行ったことのある基隆は、台北の近くにある港町として栄えた町。現在でも、基隆港は巨大タンカーや客船が出入りする国際港湾だ。また、ここは夜市でも有名で、台北観光に合わせて、夕方は廟口夜市を楽しむコースは日本人の観光ツアーとして定着している。

他方、警察の追及から逃れてジェンイーがヨウユーと2人で登った山は合歛山だが、「合歛山森林遊楽区」は、「日本人がまだ知らないかもしれない台湾」ランキング2位の絶景スポットらしい。台湾には、国家森林遊楽区が18カ所あり、合歛山もそのうちの一つに指定されている。合歛連峰は主峰、東峰、北峰、西峰、石門山、合歛尖山、石門北峰という7つの山からなっているが、これらは全て標高が3000m級で、このうち5つは「台湾百名山」にも選ばれている。

台湾では「ニイタカヤマノボレ」の暗号で有名な「新高山（玉山）」が台湾 NO. 1の高い山で、その標高は3952mもある。台湾が日本領だった時代には、標高3776mの富士山よりも高く、「日本一高い山」だった。「トラトラトラ」の暗号が「我、奇襲ニ成功セリ」の意味だったのに対し、「ニイタカヤマノボレ」は「1941年12月8日午前零時をもって対米英開戦」を伝える意味だ。合歛山の標高が何mなのかは知らないが、その雄大な風景はすばらしい。本作では、最優秀オリジナル音楽賞を受賞した音楽とともに、合歛山の美しい風景もしっかり味わいたい。しかして、ジェンイーはヨウユーを連れてなぜそんな山に逃亡したの？それが最後のシークエンスで明かされるので、それに注目！

## ■□■同性パートナーはなぜ死亡？すべての問題はここから！■□■

前述のように、本作は、事実の提示を先にやり、後からその説明をするという手法を採用している。そのため、なぜ、ヨウユーはジェンイーの養子になっているの？なぜ、シウユーは死亡したの？なぜ、ジェンイーとリーウエイは同性パートナーになっていたの？等々も、すべて事実が先行し、説明は後回しとされている。そんな手法の中、最後まで分からないのは、ジェンイーの同性パートナーであるリーウエイがなぜ死んでしまったの？ということだが、最後にそれが明かされるので、それに注目！

本作中盤では、検察官の他に2人の刑事が登場し、家宅捜索や売人エリックの逮捕等で活躍する。ところが、逮捕する前にジェンイーの逃亡を許してしまったからジェンイーを疑っていたリーガンがそれを怒ったのは当然だ。もっとも、ジェンイー自身が警察の追及を受けていることが分かっているから、ヨウユーを連れて山の中に逃げ込んでも、ジェンイーには逃亡の意思などないことは明らかだが、なぜジェンイーはわざわざそんな山の中

に逃げたの？

去る6月26日に観た『ブータン 山の教室』（19年）では、“デモンカ先生”の若い主人公は、標高2320mの首都ティンブーから、標高4800mのブータン1の辺鄙なルナナ村への赴任を、「そんなの嫌だ。高山病になってしまう」と拒否していたが、高山病が発生するのは標高何メートルくらいから？ブータンの高い山と台湾の高い山をどう比べればいいのかも私にはわからないが、そんな比較をしつつ、リーウェイが高山病で死亡していくサマをしっかりと確認し、すべての物語はここから始まったことを、しっかりと噛みしめたい。

2021（令和3）年7月5日記